

児童・生徒の発達段階からみた消費者教育(第1報)*

金銭の側面からみた検討

奥村美代子** ・宮瀬美津子*** ・岩下紀子***
柚木美保*** ・岡部由紀子****

Consumer Education Corresponding to Development Stages (Part I) Consumer Education : From the Standpoint of Money Management

Miyoko OKUMURA, Mitsuko MIYASE, Noriko IWASHITA
Miho YUNOKI and Yukiko OKABE

(Received October 1, 1988)

A survey on money management was conducted in 1988. Subjects were 2450 school children and students living in Kumamoto city. The findings were as follow.

1. An increasing tendency to waste of money was observed with the increasing school age of the subjects.
2. The relative number of subjects having an expenditure plan decreased as the amount of their pocket-money increased.
3. Subjects who had received discipline for money management from their parents were few in number.
4. Their money spending was mostly governed by their conforming behavior to their friends.
5. They knew about the credit card as a term but their knowledge about the consumer credit was poor.

結 言

多様な生活財に囲まれた現在の生活は、高度な技術革新を背景とした複雑な経済社会のなかで、ますますその実体を見定めることが難しくなっている。消費者を取り巻く諸問題は、急速な増加傾向を示しながら多様化、複雑化の様相をみせ¹⁾、更に深刻化している。

この現代社会の中で、消費者が真に豊かで主体的な生活を営むためには、おびただしい商品やサービス情報²⁾に揺り動かされず、経済社会の変化に対応した知識や判断力を持ち、地球資源の有限性をふまえた堅実な価値観に基づいた消費行動を行うことが必要である。

このような生活者としての資質を培うために、現在学校教育において系統的な消費者教育が望まれている。児童・生徒の発達段階やその生活実態に対応した教育内容を推進してゆかなくてはならない。

本研究は、消費者教育の教材化を適切に図る基礎資料を得るために、消費に関する児童・生徒の行動と意識の状況を調査し分析することを目的とする。

調査は2回にわたって行い、その結果について本報では金銭的側面に関する消費行動について分析した。

金銭的側面を問題としたのは、今日のような消費経済社会にあつては金銭消費が日常生活の基盤であり、将来さらに進行すると予測されるキャッシュレス化への対応が重要であると思うからである。今後の児童・生徒に望まれる金銭消費の概念の枠組みとしては、金銭が生存のための手段であることや個人の消費の在り方が社会に影響を及ぼすことを認識したうえで、周囲の情報や風潮に惑わされない主体性を持ち、将来的展望に基づく計画的な消費を行うことにあるとする。

* 本文の概要の一部は、日本家政学会九州支部大会(1987・11・8, 尚綱短大)において発表した。

** 家政教育

*** 大学院教育学研究科

**** 附属中学校

方 法

調査期間及び調査対象 第1回調査は1987年9月下旬から10月上旬にかけて行った。第2回調査は1988年7月に行った。調査対象者は表1-1に示すように、熊本市内及びその近郊における小学校、中学校、高校に在籍する児童・生徒とした。とくに小学生は家庭科の始まる5年生からとした。

調査方法 多肢選択式又は自由回答法により即時回答させ、全数を回収した。

第一回調査の質問紙は、児童・生徒の興味を高め、印象を強くするために漫画を用いた。

調査の結果は富士通16βを用い、統計的に処理を行った。項目によってはクロス分析を行い、篠原のCHI2RC及び3DMDL3により無答を除いたカテゴリの中で尤度比検定を行い有意差を検討した。

調査内容 今回の調査では、児童・生徒に望まれる金銭消費概念の枠組みの中から、特に主体性や計画性に関して金銭使用の実態及びカードマネーに対する理解の程度と意識について質問項目を設定した。

表1-1 調査対象 (人)

| | 小学生 | 中学生 | 高校生 | 合計 |
|-------|-----|-----|-----|------|
| 第1回調査 | 375 | 595 | 502 | 1472 |
| 第2回調査 | 228 | 367 | 383 | 978 |

結果及び考察

調査結果を1、金に関する消費行動の実態と2、カードマネーに関する理解の程度及び意識とに分けて検討した。

1. 金に関する消費行動の実態

(1) こづかい使用の実態

1) 金額

表2-1に示すように、児童・生徒の約90%は決まった額のこづかいをもらい、その金額は学校段階の進行とともに高額となっていた。小学生では44%の者が1000円台のこづかいであり、中学生では1000円台及び2000円台がほぼ平均的であった。高校生になると40%の者が5000円以上1万円未満であり、それ以上の者も6%存在しており、性差では有意な差は認められなかったが、学校段階による差は認められた($P<.01$)。また交互作用も認められた($P<.05$)。

2) 用途

こづかいの主な用途について表2-2に示したように、全体的に「おやつや飲物」、「マンガや雑誌」が多く、それぞれ20%以上を占めていた。それ以外に小学生では「文房具」、中学生では「趣味」、高校生では「洋服」、「趣味」が多く、学校段階による有意な差が認められた($P<.01$)。性別でも有意差が認められ、男子は「おもちゃやゲーム」、「趣味」が多

表1-2 調査項目の概要

| | 金 | カードマネー |
|-------|---|--|
| | ○こづかいに関して | ○クレジットカードに対する知識 |
| 第1回調査 | 1. 金額 2. 用途 3. 不足感 4. 使用態度 5. こづかい帳 6. 親への依存の程度 7. 貯金 | |
| | ○こづかい使用と家庭との関連 | ○カードマネーに関する知識 |
| 第2回調査 | 1. 親との取り決め 2. 親の指示 | 1. カードの名称 ・テレホンカード ・キャッシュカード ・クレジットカード |
| | ○こづかい使用と友人との関連 | 2. カードの性格 ・キャッシュカード ・クレジットカード |
| | 1. 友人との金の使い方 2. コミュニケーションとしてのこづかい使用の経験 ・おごる、品物をあげる ・誘われて買う ・おそろいを持つ | 3. クレジットカードの運用について ・割高 ・後払い ・借金 ・多額債務者問題 |

児童・生徒の発達段階からみた消費者教育（第1報）

表2-1 ごづかひの金額

| | 必要な時 | 決まってい | もらって | 500円未満 | 500円以上 | 千円以上 | 2千円以上 | 3千円以上 | 5千円以上 | 1万円 | 無答 | 計 | |
|-----|---------|---------|---------|------------|------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-----------|---------|------|
| | | ない | ない | | 千円未満 | 2千円未満 | 3千円未満 | 5千円未満 | 1万円未満 | 以上 | | | |
| 小学生 | 17(4.5) | 23(6.1) | 9(2.4) | 36(9.6)** | 58(15.5)** | 165(44.0)** | 37(9.9)-- | 22(5.9)-- | 2(0.5)-- | 0(0.0)-- | 6(1.6) | 375 | |
| 中学生 | 6(1.0) | 19(3.2) | 9(1.5) | 17(2.9) | 2(0.3)-- | 203(34.1)** | 178(29.9)** | 22(20.5) | 17(2.9)-- | 3(0.5)-- | 19(3.2) | 595 | |
| 高校生 | 15(3.0) | 26(5.2) | 5(1.0) | 0(0.0)-- | 0(0.0)-- | 9(1.8)-- | 27(5.4)-- | 163(32.5)** | 202(40.2)** | 30(6.0)** | 25(5.0) | 502 | |
| 男子 | 17(2.3) | 33(4.5) | 12(1.6) | 32(4.3) | 26(3.5) | 193(26.2) | 112(15.2) | 165(22.4) | 108(14.6) | 19(2.6) | 21(2.8) | 738 | |
| 女子 | 21(2.9) | 35(4.8) | 11(1.5) | 21(2.9) | 34(4.6) | 184(25.1) | 130(17.7) | 142(19.3) | 113(15.4) | 14(1.9) | 29(4.0) | 734 | |
| 小学生 | 男子 | 11(5.6) | 15(7.7) | 5(2.4) | 22(11.3)** | 24(12.2)** | 84(42.1)** | 20(9.8)-- | 13(6.5)-- | 2(1.0)-- | 0(0.0)- | 3(1.5) | 199 |
| | 女子 | 6(3.4) | 8(4.7) | 4(2.3) | 14(12.2)** | 34(19.5)** | 81(45.7)** | 17(9.7)-- | 9(5.1)-- | 0(0.0)-- | 0(0.0)- | 3(1.7) | 176 |
| 中学生 | 男子 | 3(0.9) | 8(2.4) | 5(1.6) | 10(3.5) | 2(0.7)-- | 103(34.2)** | 78(25.2)** | 80(25.6) | 11(3.5)-- | 3(0.1) | 9(2.9) | 312 |
| | 女子 | 3(1.1) | 11(3.9) | 4(1.4) | 7(2.4) | 0(0.0)-- | 100(35.6)** | 100(35.4)** | 42(14.8)-- | 6(2.1)-- | 0(0.0)-- | 10(3.5) | 283 |
| 高校生 | 男子 | 3(1.4) | 10(4.4) | 2(0.9) | 0(0.0)-- | 0(0.0)-- | 6(2.8)-- | 14(6.4)-- | 72(31.7)** | 95(41.9)** | 16(7.0)** | 9(4.0) | 227 |
| | 女子 | 12(4.4) | 16(5.9) | 3(1.1) | 0(0.0)-- | 0(0.0)-- | 3(1.2)-- | 13(5.1)-- | 91(33.1)** | 107(38.9)** | 14(5.1)** | 16(5.8) | 275 |
| 計 | | 38(2.6) | 68(4.6) | 23(1.6) | 53(3.6) | 60(4.1) | 377(25.6) | 242(16.4) | 307(20.9) | 221(15.0) | 33(2.2) | 50(3.4) | 1472 |

残差分析による有意水準*又は $p < .05$, **又は $p < .01$
金額についてのみ検定を行った。

三要因の尤度比検定

| 変 動 源 | 自由度 (df) | 尤度比 (G ²) | P |
|---------------|-------------|--------------------------|-----|
| 学校段階(A)×金額(C) | 12 | 1031.168 | .01 |
| 性別(B)×(C) | 6 | 7.299 | ns |
| (A)×(B)×(C) | 12 | 24.259 | .05 |
| 計 | 30 | 1062.727 | .01 |

表2-2 ごづかひの用途

| | おやつ | まんが | 参考書 | おもちゃ | 文房具 | 洋服 | 趣味 | 映画など | 無答 | 計 | |
|-----|-------------|------------|-----------|------------|------------|-------------|-------------|------------|------------|---------|------|
| | 飲み物 | 雑誌 | 小説 | ゲーム | | | | の 娯 楽 | | | |
| 小学生 | 132(35.2)** | 91(24.3) | 13(3.5) | 27(7.2)** | 53(14.1)** | 8(2.1)-- | 29(7.7)-- | 3(0.8)-- | 19(5.1) | 375 | |
| 中学生 | 164(27.6) | 170(28.6)* | 9(1.5)- | 23(3.9) | 35(5.9) | 54(9.1)- | 82(13.8) | 43(7.2) | 15(2.5) | 595 | |
| 高校生 | 111(22.1)-- | 111(22.1)- | 15(3.0) | 3(0.6)-- | 17(3.4)-- | 106(21.1)** | 81(16.1)* | 46(9.2)** | 12(2.4) | 502 | |
| 男子 | 198(26.8) | 177(24.0) | 15(2.0) | 50(6.8)** | 24(3.3)-- | 69(9.3)- | 131(17.8)** | 53(7.2) | 21(2.8) | 738 | |
| 女子 | 209(28.5) | 195(26.6) | 22(3.0) | 3(0.4)-- | 81(11.0)** | 99(13.5)* | 61(8.3)-- | 39(5.3) | 25(3.4) | 734 | |
| 小学生 | 男子 | 79(40.1)** | 42(21.0) | 5(2.4) | 26(13.1)** | 12(6.0) | 3(1.6)-- | 22(11.0) | 0(0.0)-- | 10(5.0) | 199 |
| | 女子 | 53(30.4) | 49(27.4) | 8(4.4) | 1(0.6)- | 41(23.7)** | 5(2.8)-- | 7(3.8)-- | 3(1.8)-- | 9(5.3) | 176 |
| 中学生 | 男子 | 84(27.1) | 85(27.5) | 5(1.5) | 21(7.0)** | 9(2.8)-- | 26(8.0)- | 55(17.4)** | 21(6.7) | 6(2.0) | 312 |
| | 女子 | 80(28.2) | 85(30.0)* | 4(1.6) | 2(0.7)-- | 26(9.2) | 28(9.8) | 27(9.5) | 22(7.8) | 9(3.3) | 283 |
| 高校生 | 男子 | 35(15.4)-- | 50(23.0) | 5(2.0) | 3(1.4)- | 3(1.3)-- | 40(17.4)** | 54(23.3) | 32(14.0)** | 5(2.0) | 227 |
| | 女子 | 76(27.5) | 61(22.1) | 10(3.5) | 0(0.0)-- | 14(4.9) | 66(24.3)** | 27(10.1) | 14(5.2) | 7(2.6) | 275 |
| 計 | | 407(27.6) | 372(25.3) | 37(2.5) | 53(3.6) | 105(7.1) | 168(11.4) | 192(13.0) | 92(6.3) | 46(3.1) | 1472 |

残差分析による有意水準*又は $p < .05$, **又は $p < .01$

三要因の尤度比検定

| 変 動 源 | 自由度 (df) | 尤度比 (G ²) | P |
|---------------|-------------|--------------------------|-----|
| 学校段階(A)×用途(B) | 14 | 212.931 | .01 |
| 性別(B)×(C) | 7 | 119.193 | .01 |
| (A)×(B)×(C) | 14 | 28.218 | .05 |
| 計 | 35 | 360.342 | .01 |

表2-3 金額の分類

| | 小学生 | 中学生 | 高校生 |
|-------|------------|------------|------------|
| 少ない | 500円未満 | 千円未満 | 3千円未満 |
| やや少ない | 500円以上千円未満 | 千円以上2千円未満 | 3千円以上5千円未満 |
| 平均 | 千円以上2千円未満 | 2千円以上3千円未満 | 5千円以上6千円未満 |
| やや多い | 2千円以上4千円未満 | 3千円以上5千円未満 | 6千円以上8千円未満 |
| 多い | 4千円以上 | 5千円以上 | 8千円以上 |

く、女子は「文房具」、「洋服」が多かった ($P < .01$)。交互作用も認められた ($P < .05$)。

1)の金額について、各学校段階ごとの平均額を算定し、表2-3のように「(平均額より)少ない」、「やや少ない」、「平均」、「やや多い」、「多い」の5段階に分けて用途との関係をみた。その結果、こづかい金額が多い者ほど、小学生では「おもちゃやゲーム」や「趣味」、中・高校生では「洋服」や「映画などの娯楽」のためにこづかいを使っていることがわかった ($P < .01$, 表2-9)。

小学生及び低学年の中学生の主な生活場面は学校か家庭であり、しかも学校では金銭所持が禁止されているが、高校生は生活場面が拡大し友人との活動も多くなり、金銭の所持も自由である。このようなことがこづかい金額や用途にも影響するのではなからうか。

3) 不足感

表2-4に示したように、与えられたこづかいが「よく不足する」者は学校段階の進行とともに28%から62%に急増しており、有意差が認められた ($P < .01$)。性差はなかったが交互作用は認められ ($P < .01$)、小学生では女子の方に「よく不足する」者が多いが、高校生になると男子の方に多くなっていた。

不足感と用途の関係をみると、「不足する」者は「おやつや飲み物」や「洋服」、「映画などの娯楽」にこづかいを使っていた ($P < .01$, 表2-9)。また、不足感は金額によらず、高額のものにも多くみられた (ns, 表2-9)。

比較的高額なこづかいをもらっている者の中には、洋服など高価な買物を自分でするようになり、また交際などへの出費もかさみ不足感を感じている者も多いと思われる。小・中学生の場合、欲しい物はある程度親や年長者が買い与えているため、心理的にも不足感は少ないのではなからうか。これに対し、高校生になると購入したいと思う品物が増え、その値段と所持金とにギャップがあるため不足感が強く

表2-4 こづかいの不足感

| | よく不足する | 不足しない | 無答 | 計 |
|-----|----------------------------|-------------------------|---------|------|
| 小学生 | 106(28.3) ⁻⁻ | 267(71.2) ⁺⁺ | 2(0.5) | 375 |
| 中学生 | 314(52.8) ⁺ | 275(46.2) ⁻ | 6(1.0) | 595 |
| 高校生 | 313(62.4) ⁺⁺ | 186(37.1) ⁻⁻ | 3(0.6) | 502 |
| 男子 | 379(51.4) | 354(48.0) | 5(0.7) | 738 |
| 女子 | 354(48.2) | 374(51.0) | 6(0.8) | 734 |
| 小学生 | 男子 71(36.0) ⁻⁻ | 126(63.1) ⁺⁺ | 2(1.1) | 199 |
| | 女子 35(39.5) ⁻⁻ | 141(60.5) ⁺⁺ | 0(0.0) | 176 |
| 中学生 | 男子 164(52.3) | 146(47.1) | 2(0.7) | 312 |
| | 女子 150(52.6) | 129(45.8) | 4(1.5) | 283 |
| 高校生 | 男子 144(63.0) ⁺⁺ | 82(36.6) ⁻⁻ | 1(0.4) | 227 |
| | 女子 169(60.8) ⁺⁺ | 104(38.6) ⁻⁻ | 2(0.7) | 275 |
| 計 | 733(49.8) | 728(49.5) | 11(0.7) | 1472 |

残差分析による有意水準^{*}又は^{*} $p < .05$, ^{**}又は^{**} $p < .01$

三要因の尤度比検定

| 変 動 源 | 自由度 (df) | 尤度比 (G^2) | P |
|----------------|----------|---------------|-----|
| 学校段階(A)×不足感(C) | 2 | 107.078 | .01 |
| 性別(B)×(C) | 1 | 1.385 | ns |
| (A)×(B)×(C) | 2 | 10.965 | .01 |
| 計 | 5 | 119.429 | .01 |

なるとも考えられる。とくに近年はブランドや高級品志向もみられ、ますますその差が大きくなるのであろう。

4) 使用態度

表2-5に示すように、金を何に使ったかわかっているという「堅実型」の者は小学生では70%以上を占めているものの、中・高校生になると50%台に減少しており、学校段階による有意な差が認められた ($P < .01$)。性差及び交互作用は認められなかった。

また、金額の多い者ほど金を何に使ったかわかっていない「浪費型」であり、少ない者ほど「堅実型」であった ($P < .01$, 表2-9)。

こづかい額が多い者ほど出費がかさみ、同時に管

表2-5 こづかいの使用態度

| | 浪費 | 堅実 | 無答 | 計 |
|-----|----------------|-------------|-----------|------|
| 小学生 | 63(16.8)-- | 287(76.5)** | 25(6.7) | 375 |
| 中学生 | 180(30.3) | 334(56.1) | 81(13.6) | 595 |
| 高校生 | 190(37.8)** | 261(52.0)-- | 51(10.2) | 502 |
| 男子 | 221(29.9) | 428(58.0) | 89(12.1) | 738 |
| 女子 | 212(28.9) | 454(61.9) | 68(9.3) | 734 |
| 小学生 | 男子 40(20.2)-- | 143(71.9)** | 16(8.0) | 199 |
| | 女子 23(13.2)-- | 144(81.7)** | 9(5.2) | 176 |
| 中学生 | 男子 92(28.8) | 172(55.5) | 48(15.7) | 312 |
| | 女子 88(31.2) | 162(57.1) | 33(11.6) | 283 |
| 高校生 | 男子 89(39.0)** | 113(50.1)-- | 25(10.9) | 227 |
| | 女子 101(36.9)** | 148(54.1)-- | 26(9.1) | 275 |
| 計 | 433(29.4) | 882(60.0) | 157(10.7) | 1472 |

残差分析による有意水準*又は**p<.05, **又は--p<.01

三要因の尤度比検定

| 変 動 源 | 自由度 (df) | 尤度比 (G ²) | P |
|-----------------|----------|-----------------------|-----|
| 学校段階(A)×使用態度(C) | 2 | 56.872 | .01 |
| 性別(B)×(C) | 1 | 0.734 | ns |
| (A)×(B)×(C) | 2 | 3.749 | ns |
| 計 | 5 | 61.355 | .01 |

理も不徹底になることがわかった。

5) こづかい帳

表2-6に示すように、こづかい帳に「記録している」者は全体的に少ないが、小学生で25%、中学生で12%、高校生で9%と学校段階の進行とともに減少しており有意差が認められた(P<.01)。性差も認められ(P<.05)、「記録している」者は女子に多かった。交互作用は認められなかった。

また、「記録している」者にはこづかいに不足感を感じる者の割合が少ないが、「記録していない」者には多いことがわかった(P<.01, 表2-9)。

4)と5)の結果から意識面では堅実であると思っっている者でも、実際の収支額を確実に把握しているとは限らないことが推察される。

小学校6年生では金銭収支の記録の仕方、高校家庭一般では家計簿のつけ方などを学習しているにもかかわらず、記帳の態度が身につけていないのは、金銭管理における重要性が今一つ子どもたちに理解されていないためではないだろうか。はっきりとした購入目的を持った計画的消費を行うには、記帳が大きな役目を果たしており、一層の定着化を図る指導が必要である。

6) 親への依存の程度

表2-6 こづかい帳の記録

| | している | していない | 無答 | 計 |
|-----|---------------|-------------|--------|------|
| 小学生 | 95(25.3)** | 278(74.1)-- | 9(0.5) | 375 |
| 中学生 | 70(11.8)- | 520(87.4)* | 5(0.8) | 595 |
| 高校生 | 44(8.9)-- | 456(90.8)** | 2(0.4) | 502 |
| 男子 | 71(9.6)-- | 663(89.8)** | 4(0.5) | 738 |
| 女子 | 138(18.8)** | 591(80.5)-- | 5(0.7) | 734 |
| 小学生 | 男子 34(17.0) | 163(82.0) | 2(1.1) | 199 |
| | 女子 61(34.8)** | 115(65.3)-- | 0(0.0) | 176 |
| 中学生 | 男子 27(8.9)-- | 284(90.7)** | 1(0.4) | 312 |
| | 女子 43(15.1) | 236(83.3) | 4(1.5) | 283 |
| 高校生 | 男子 10(4.5)-- | 216(95.2)** | 1(0.4) | 227 |
| | 女子 34(12.9) | 240(86.8) | 1(0.3) | 275 |
| 計 | 209(14.2) | 1254(85.2) | 9(0.6) | 1472 |

残差分析による有意水準*又は**p<.05, **又は--p<.01

三要因の尤度比検定

| 変 動 源 | 自由度 (df) | 尤度比 (G ²) | P |
|---------------|----------|-----------------------|-----|
| 学校段階(A)×記帳(C) | 2 | 49.038 | .01 |
| 性別(B)×(C) | 1 | 25.928 | .01 |
| (A)×(B)×(C) | 2 | 5.817 | ns |
| 計 | 5 | 80.836 | .01 |

表2-7に示すように、「こづかいが不足したら家の人に頼る」者は学校段階の進行とともに増加し、高校生では38%に達し有意差が認められた(P<.01)。性差も認められ(P<.05)、「家の人に頼る」者は女子に多く、逆に「もらったこづかいの中でやりくりをする」者は男子に多かった。交互作用は認められなかったが、残差分析の結果、「家の人に頼る」傾向は高校生の女子に強かった。

4)~6)の結果より、男子には経済的自立心がみられるものの、金銭管理能力は劣っていることがわかった。これは、性的役割認識の違いなど種々の要因の他に、家庭科教育の積み重ねによる差も影響しているのではないかと推察される。

7) 貯金

表2-8のように、貯金をもつ者は学校段階の進行に伴って減少し、有意差が認められた(P<.05)。性差も認められ(P<.05)、女子の方が貯金をもつ者が多く、交互作用はなかった。

こづかい金額との関係を見ると、低額の者ほど貯金をしている者が多かった(P<.01, 表2-9)。

以上の結果より、学校段階の進行や扱う金額の増加とともに、実際の金銭使用及び管理状況は必ずさんになっていく傾向がみられた。今後の金銭教育の教

表2-7 親への依存の程度

| | 家の人に頼る | やりくりをする | 無答 | 計 |
|-----|----------------------------|-------------------------|---------|------|
| 小学生 | 96(25.6) ⁻ | 265(70.7) ⁺ | 14(3.7) | 375 |
| 中学生 | 170(28.6) | 411(69.1) | 14(2.4) | 595 |
| 高校生 | 190(37.8) ⁺⁺ | 305(60.8) ⁻⁻ | 7(1.4) | 502 |
| 男子 | 191(25.9) ⁻⁻ | 530(71.8) ⁺⁺ | 17(2.3) | 738 |
| 女子 | 265(36.1) ⁺⁺ | 451(61.4) ⁻⁻ | 18(2.5) | 734 |
| 小学生 | 男子 49(24.6) | 139(69.9) | 11(5.6) | 199 |
| | 女子 47(26.7) | 126(71.7) | 3(1.7) | 176 |
| 中学生 | 男子 74(23.7) ⁻⁻ | 234(75.1) ⁺⁺ | 4(1.2) | 312 |
| | 女子 96(34.1) | 177(62.2) | 10(3.6) | 283 |
| 高校生 | 男子 68(29.6) | 157(69.7) | 2(0.8) | 227 |
| | 女子 122(44.4) ⁺⁺ | 148(53.9) ⁻⁻ | 5(1.7) | 275 |
| 計 | 456(31.0) | 981(66.6) | 35(2.4) | 1472 |

残差分析による有意水準^{*}又は^{*}p<.05, ^{**}又は⁻⁻p<.01

三要因の尤度比検定

| 変 動 源 | 自由度(df) | 尤度比(G ²) | P |
|-----------------|---------|----------------------|-----|
| 学校段階(A)×依存程度(C) | 2 | 15.990 | .01 |
| 性別(B)×(C) | 1 | 18.413 | .01 |
| (A)×(B)×(C) | 2 | 2.049 | ns |
| 計 | 5 | 36.452 | .01 |

表2-8 貯金

| | している | していない | 無答 | 計 |
|-----|----------------------------|-------------------------|---------|------|
| 小学生 | 320(85.3) ⁺⁺ | 53(14.1) ⁻⁻ | 2(0.5) | 375 |
| 中学生 | 411(69.1) | 181(30.4) | 3(0.5) | 595 |
| 高校生 | 307(61.2) ⁻⁻ | 190(37.9) ⁺⁺ | 5(1.0) | 502 |
| 男子 | 503(68.2) ⁻ | 230(31.2) ⁺ | 5(0.7) | 738 |
| 女子 | 535(72.9) ⁺ | 194(26.4) ⁻ | 5(0.7) | 734 |
| 小学生 | 男子 165(82.9) ⁺⁺ | 32(16.1) ⁻⁻ | 2(1.1) | 199 |
| | 女子 155(88.3) ⁺⁺ | 21(11.7) ⁻⁻ | 0(0.0) | 176 |
| 中学生 | 男子 209(67.1) | 103(32.9) | 0(0.0) | 312 |
| | 女子 202(71.3) | 78(27.6) | 3(1.1) | 283 |
| 高校生 | 男子 129(57.2) ⁻⁻ | 95(41.6) ⁺⁺ | 3(1.2) | 227 |
| | 女子 178(65.7) ⁻ | 95(33.7) ⁺ | 2(0.7) | 275 |
| 計 | 1038(70.5) | 424(28.8) | 10(0.7) | 1472 |

残差分析による有意水準^{*}又は^{*}p<.05, ^{**}又は⁻⁻p<.01

三要因の尤度比検定

| 変 動 源 | 自由度(df) | 尤度比(G ²) | P |
|---------------|---------|----------------------|-----|
| 学校段階(A)×貯金(C) | 2 | 65.689 | .01 |
| 性別(B)×(C) | 1 | 4.036 | .05 |
| (A)×(B)×(C) | 2 | 2.262 | ns |
| 計 | 5 | 71.987 | .01 |

表2-9 金額及び不足感とこづかい使用実態との関係

| | 金 額 | | | 不 足 感 | | |
|-------|-------|------------------------|-------|-------|-------------------------|-------|
| 金 額 | — | | | df=4 | G ² = 8.097 | ns |
| 用 途 | df=28 | G ² =67.724 | P<.01 | df=7 | G ² = 61.601 | P<.01 |
| 不足感 | df= 4 | G ² = 8.097 | ns | — | | |
| 使用態度 | df= 4 | G ² =28.051 | P<.01 | df=1 | G ² =101.479 | P<.01 |
| こづかい帳 | df= 4 | G ² = 5.342 | ns | df=1 | G ² = 27.579 | P<.01 |
| 依存の程度 | df= 4 | G ² =23.330 | P<.01 | df=1 | G ² = 20.833 | P<.01 |
| 貯 金 | df= 4 | G ² =19.305 | P<.01 | df=1 | G ² = 82.098 | P<.01 |

材を考える際には、管理のための手腕的な知識だけでなく、堅実な金銭価値意識に基づく意思決定能力や経済的自立心を身につけさせる学習も必要である。

(2) こづかい使用と家庭や友人との関連

1) 家庭との関連

a) こづかい使用に関する親との取り決め

表3-1に示したように、全体的に親子間でこづかいの使い方を「決めていない」者の方が圧倒的に多く、小・中学生で70%台、高校生で80%台と学校段階の進行とともに増加しており、有意差が認められた(P<.01)。性差も認められ(P<.01)、「決めていない」は男子に多かった。交互作用は認められ

なかった。

b) 親の指示

こづかい使用に関して、どのような親の指示があるかについて表3-2に示した。小学生と高校生では「無駄使いするな」が最も多く、次に「何も言われない」が多かった。中学生では後者の方がやや多かった。その他の指示は、いずれも10%以下であるが、「特定の品物の購入禁止」や「貯金」、「計画的に使いなさい」という指示は、学校段階の進行に伴い減少傾向が認められた(P<.05)。性差及び交互作用は認められなかったが、残差分析の結果、小学生男子に「何も言われない」者が少ないことがわかった。

表3-1 こづかい使用に関する親との取り決め

| | 決めてある | 決めてない | もらわない | 無答 | 計 |
|--------|------------------------|-------------------------|------------------------|---------|-----|
| 小学生 | 23(10.1) ⁺ | 159(70.0) ⁻ | 39(17.2) | 6(2.6) | 227 |
| 中学生 | 31(8.5) | 266(72.9) ⁻ | 61(16.7) | 7(2.0) | 365 |
| 高校生 | 11(2.9) ⁻⁻ | 315(82.5) ⁺⁺ | 46(12.0) ⁻ | 10(2.6) | 382 |
| 男子 | 31(6.5) | 381(79.4) ⁺⁺ | 51(10.6) ⁻⁻ | 17(3.5) | 480 |
| 女子 | 34(6.9) | 359(72.7) ⁻⁻ | 95(19.2) ⁺⁺ | 6(1.2) | 494 |
| 小学生 男子 | 11(9.6) | 88(77.2) | 10(8.8) | 5(4.4) | 114 |
| 小学生 女子 | 12(10.6) | 71(62.8) ⁻⁻ | 29(25.7) ⁺⁺ | 1(0.9) | 113 |
| 中学生 男子 | 16(8.7) | 137(74.5) | 26(14.1) | 5(2.7) | 184 |
| 中学生 女子 | 15(8.3) | 129(71.3) ⁻ | 35(19.3) | 2(6.6) | 181 |
| 高校生 男子 | 4(2.2) ⁻⁻ | 156(85.7) ⁺⁺ | 15(8.2) ⁻⁻ | 7(3.8) | 182 |
| 高校生 女子 | 7(3.5) ⁻⁻ | 159(79.5) | 31(15.5) | 3(1.5) | 200 |
| 計 | 65(6.7) | 740(76.0) | 146(15.0) | 23(2.4) | 974 |

残差分析による有意水準⁺又は⁻p<.05, ⁺⁺又は⁻⁻p<.01

三要因の尤度比検定

| 変 動 源 | 自由度 (df) | 尤度比 (G ²) | P |
|-----------------|----------|-----------------------|-----|
| 学校段階(A)×とり決め(C) | 4 | 23.025 | .01 |
| 性別(B)×(C) | 2 | 13.604 | .01 |
| (A)×(B)×(C) | 4 | 4.727 | ns |
| 計 | 10 | 41.355 | .01 |

表3-2 親の指示

| | 何言われもない | 特定の品物の購入禁止 | 貯金しなさい | 細かなチェック | 計画的に使いなさい | 無駄使いするな | その他 | 無答 | 計 |
|--------|------------------------|-----------------------|---------------------|---------------------|-----------------------|------------------------|---------|-----------|-----|
| 小学生 | 49(21.6) ⁻⁻ | 18(7.9) | 13(5.7) | 6(2.6) | 23(10.1) | 81(35.7) | 14(6.2) | 23(10.1) | 227 |
| 中学生 | 109(29.9) | 20(5.5) | 11(3.0) | 11(3.0) | 33(9.0) | 106(29.0) ⁻ | 31(8.5) | 44(12.1) | 365 |
| 高校生 | 106(27.7) | 21(5.5) | 9(2.4) | 6(1.6) | 20(5.2) ⁻ | 130(34.0) | 17(4.5) | 73(19.1) | 382 |
| 男子 | 128(26.7) | 32(6.7) | 16(3.3) | 15(3.1) | 32(6.7) | 151(31.5) | 32(6.7) | 74(15.4) | 480 |
| 女子 | 136(27.5) | 27(5.5) | 17(3.4) | 8(1.6) | 44(8.9) | 166(33.6) | 30(6.1) | 66(13.4) | 494 |
| 小学生 男子 | 20(17.5) ⁻⁻ | 13(11.4) ⁺ | 8(7.0) ⁺ | 4(3.5) | 7(6.1) | 43(37.7) | 7(6.1) | 12(10.5) | 114 |
| 小学生 女子 | 29(25.7) | 5(4.4) | 5(4.4) | 2(1.8) | 16(14.2) ⁺ | 38(33.6) | 7(6.2) | 11(9.7) | 113 |
| 中学生 男子 | 57(31.0) | 12(6.5) | 3(1.6) | 8(4.3) ⁺ | 16(8.7) | 51(27.7) ⁻ | 16(8.7) | 21(11.4) | 184 |
| 中学生 女子 | 52(28.7) | 8(4.4) | 8(4.4) | 3(1.7) | 17(9.4) | 55(30.4) | 15(8.3) | 23(12.7) | 181 |
| 高校生 男子 | 51(28.0) | 7(3.8) | 5(2.7) | 3(1.6) | 9(4.9) | 57(31.3) | 9(4.9) | 41(22.5) | 182 |
| 高校生 女子 | 55(27.5) | 14(7.0) | 4(2.0) | 3(1.5) | 11(5.5) | 73(36.5) | 8(4.0) | 32(16.0) | 200 |
| 計 | 264(27.1) | 59(6.1) | 33(3.4) | 23(2.4) | 76(7.8) | 317(32.5) | 62(6.4) | 140(14.4) | 974 |

残差分析による有意水準⁺又は⁻p<.05, ⁺⁺又は⁻⁻p<.01 但し、無答のカテゴリーは除いて検定した。

三要因の尤度比検定

| 変 動 源 | 自由度 (df) | 尤度比 (G ²) | P |
|-----------------|----------|-----------------------|-----|
| 学校段階(A)×親の指示(C) | 12 | 22.994 | .05 |
| 性別(B)×(C) | 6 | 4.958 | ns |
| (A)×(B)×(C) | 12 | 14.091 | ns |
| 計 | 30 | 42.044 | ns |

表3-3 親の指示の有無と消費行動との関係

| | df | こづかい意識 | | 友人との金の使い方 | | 友人に誘われて買う | | おそろいをもつ | |
|------------------|----|----------------|------|----------------|------|----------------|----|----------------|------|
| | | G ² | P | G ² | P | G ² | P | G ² | P |
| 指示の有無(A)×従属変数(C) | 2 | 32.803 | <.01 | 4.059 | ns | 1.644 | ns | 8.334 | ns |
| 学校段階(B)×(C) | 4 | 18.503 | <.01 | 53.016 | <.01 | 3.259 | ns | 97.190 | ns |
| (A)×(B)×(C) | 4 | 14.124 | <.01 | 1.342 | ns | 2.752 | ns | 5.954 | ns |
| 計 | 10 | 65.430 | <.01 | 58.868 | <.01 | 7.655 | ns | 111.478 | <.01 |

表4-1 友人との金の使い方

| | 目的的使用 | 偶然的使用 | コミュニケーション | 無答・使わない | 計 |
|-------|-------------------------|-------------------------|------------------------|-----------|-----|
| 小学生 | 78(34.4) ⁻ | 71(31.3) | 26(11.5) | 52(22.9) | 227 |
| 中学生 | 176(48.2) ⁺⁺ | 70(19.2) ⁻⁻ | 59(16.2) ⁺⁺ | 60(16.4) | 365 |
| 高校生 | 158(41.4) | 155(40.6) ⁺⁺ | 12(3.1) ⁻⁻ | 57(14.9) | 382 |
| 男子 | 205(42.7) | 151(31.5) | 19(4.0) ⁻⁻ | 105(21.9) | 480 |
| 女子 | 207(41.9) | 145(29.4) | 78(15.8) ⁺⁺ | 64(17.4) | 494 |
| 小学生男子 | 42(36.8) | 36(31.6) | 7(6.1) | 29(25.5) | 114 |
| 小学生女子 | 36(31.9) ⁻ | 35(31.0) | 19(16.8) ⁺⁺ | 23(20.4) | 113 |
| 中学生男子 | 94(51.1) ⁺⁺ | 42(22.8) ⁻ | 9(4.9) ⁻ | 39(21.2) | 184 |
| 中学生女子 | 82(45.3) | 28(15.5) ⁻⁻ | 50(27.6) ⁺⁺ | 21(11.6) | 181 |
| 高校生男子 | 69(37.9) | 73(40.1) ⁺⁺ | 3(1.6) ⁻⁻ | 37(20.3) | 182 |
| 高校生女子 | 89(44.5) | 82(41.0) ⁺⁺ | 9(4.5) ⁻⁻ | 20(10.0) | 200 |
| 計 | 412(42.3) | 296(30.4) | 97(10.0) | 169(17.4) | 974 |

残差分析による有意水準*又は⁻p<.05, **又は⁻⁻p<.01

三要因の尤度比検定

| 変動源 | 自由度(df) | 尤度比(G ²) | P |
|----------------|---------|----------------------|-----|
| 学校段階(A)×使い方(C) | 4 | 76.391 | .01 |
| 性別(B)×(C) | 2 | 34.883 | .01 |
| (A)×(B)×(C) | 4 | 7.923 | ns |
| 計 | 10 | 114.197 | .01 |

以上の結果より、児童・生徒のこづかいは親の関与が少なく自由に使える余裕的な性格が強いと推察される。また、使い方に関しての指示をほとんど受けていない「放任型」が3割近く存在することは金銭使用の実態からみて問題が多いと思われる。

次に、親から金銭使用に関して何らかの指示を受けている者は、消費行動にもよい影響が現れているのではないかと考えクロス分析を行った。検定結果は表3-3に示した。その結果、こづかいを使う時、「大切に使う」、「無駄使いしない」など、意識的に使用すると答えた者は、親から指示を受けている者の方が多かった(P<.01)。しかし、友人との金銭使用の際、目的を持った使用(趣味、娯楽等)をする者と、偶然的な飲み食いに使用する者の割合は、指示の有無による差がみられず、友達に誘われて買物を

する者の割合も同様であった。更におそろいを持つ傾向は指示の有る者の方に強かった。このことから、親の指示は、金銭収支の計画性にやや注意が必要である者に対してなされていることが考えられる。単に「無駄使いするな」とか「計画的に使いなさい」といった指示の繰り返しだけでは金銭教育として不十分であり、意識だけでなく実際の消費行動を望ましいものへ導く手だてが必要である。

今日の児童・生徒は生活に必要な物をこづかいとは別枠でほとんど親に買ってもらう状況にある³⁾と言われている。これでは将来一定の収入でやりくりをして生活するために必要な金銭管理能力は育たない。発達段階に合わせて徐々に自分の生活必需品を自分で購入するための金銭を与え、管理させるという実践の中で、親が適切な指導・助言を行うことが

表4-2 おごったり、品物をあげたりする

| | よくある 時々 | ある | なし | 無答 | 計 |
|-----|----------------------------|-------------------------|---------|-----|---|
| 小学生 | 159(70.1) | 62(27.3) | 6(2.6) | 227 | |
| 中学生 | 243(66.6) ⁻⁻ | 114(31.2) ⁺⁺ | 8(2.2) | 365 | |
| 高校生 | 301(78.8) ⁺⁺ | 73(19.1) ⁻⁻ | 8(2.1) | 382 | |
| 男子 | 333(69.4) | 129(26.9) | 18(3.8) | 480 | |
| 女子 | 370(74.9) | 120(24.3) | 4(0.8) | 494 | |
| 小学生 | 男子 76(66.7) | 33(28.9) | 5(4.4) | 114 | |
| | 女子 83(73.4) | 29(25.7) | 1(0.9) | 113 | |
| 中学生 | 男子 112(60.8) ⁻⁻ | 65(35.3) ⁺⁺ | 7(3.8) | 184 | |
| | 女子 131(72.3) | 49(27.1) | 1(0.6) | 181 | |
| 高校生 | 男子 145(79.7) ⁺⁺ | 31(17.0) ⁻⁻ | 6(3.3) | 182 | |
| | 女子 156(78.0) | 42(21.0) | 2(1.0) | 200 | |
| 計 | 703(72.2) | 249(25.6) | 22(2.3) | 974 | |

残差分析による有意水準*又は⁻⁻p<.05, **又は⁺⁺p<.01

三要因の尤度比検定

| 変動源 | 自由度 (df) | 尤度比 (G ²) | P |
|----------------|-------------|--------------------------|-----|
| 学校段階(A)×おごり(C) | 2 | 15.395 | .01 |
| 性別(B)×(C) | 1 | 1.450 | ns |
| (A)×(B)×(C) | 2 | 3.562 | ns |
| 計 | 5 | 20.406 | .01 |

必要なのではなかろうか。その際に、個々の家庭での購入目的、金銭の準備、収入との関連、価値判断してからの修正という金銭使用のプロセスを年代に応じて具体的に教え、もっと自分の家の経済に家族の一員として関わりを持たせ、主体性や友人の家とは異なることの自覚を育てることが大切である。

2) 友人との関連

a) こづかいの使い方

友人づき合いに関連した金銭消費の実態について表4-1に示した。小学生と高校生では「目的的使用」と「偶然的使用」がほぼ同じ割合であるが、中学生は「偶然的使用」が減少し「コミュニケーションの使用」(プレゼント等)が増加していた。このため学校段階による差が認められた(P<.01)。性差も認められ(P<.01)、「コミュニケーションの使用」は女子に多かった。交互作用は認められなかったが、残差分析の結果、「目的的使用」は中学生男子に、「偶然的使用」は高校生男女に、「コミュニケーション的使用」は小・中学生の女子に多かった。

b) コミュニケーションとしてのこづかい使用

表4-2に示したように、友人におごったり品物をあげたりすることがあると答えた者は、学校段階の進行とともに増加しており、有意差が認められた

表4-3 貸借の経験

| | よくする | 時々する | ない | 無答 | 計 |
|-----|---------------------------|-------------------------|-------------------------|--------|-----|
| 小学生 | 8(3.5) ⁻⁻ | 65(28.6) ⁻⁻ | 148(65.2) ⁺⁺ | 6(2.6) | 227 |
| 中学生 | 16(4.4) ⁻⁻ | 224(61.4) ⁺ | 124(34.0) | 1(0.3) | 365 |
| 高校生 | 52(13.6) ⁺⁺ | 264(69.1) ⁺⁺ | 65(17.0) | 1(0.3) | 382 |
| 男子 | 49(10.2) ⁺⁺ | 265(55.2) | 161(33.5) | 5(1.0) | 480 |
| 女子 | 27(5.5) ⁻⁻ | 288(58.3) | 176(35.6) | 3(0.6) | 494 |
| 小学生 | 男子 4(3.5) | 37(32.5) ⁻⁻ | 70(61.4) ⁺⁺ | 3(2.6) | 114 |
| | 女子 4(3.5) | 28(24.8) ⁻⁻ | 78(69.0) ⁺⁺ | 3(2.7) | 113 |
| 中学生 | 男子 9(4.9) | 117(63.6) ⁺ | 57(31.0) | 1(0.5) | 184 |
| | 女子 7(3.9) ⁻ | 107(59.1) | 67(37.0) | 0(0.0) | 181 |
| 高校生 | 男子 36(19.8) ⁺⁺ | 111(61.0) | 34(18.7) ⁻⁻ | 1(0.5) | 182 |
| | 女子 16(8.0) | 153(76.5) ⁺⁺ | 31(15.5) ⁻⁻ | 0(0.0) | 200 |
| 計 | 76(7.8) | 553(56.8) | 337(34.6) | 8(0.8) | 974 |

残差分析による有意水準*又は⁻⁻p<.05, **又は⁺⁺p<.01

三要因の尤度比検定

| 変動源 | 自由度 (df) | 尤度比 (G ²) | P |
|---------------|-------------|--------------------------|-----|
| 学校段階(A)×貸借(C) | 4 | 167.017 | .01 |
| 性別(B)×(C) | 2 | 7.820 | .05 |
| (A)×(B)×(C) | 4 | 9.147 | ns |
| 計 | 10 | 183.984 | .01 |

(P<.01)、性差および交互作用は認められなかったが、残差分析の結果、「おごったりあげたりする」者は高校生男子に多い傾向があった。

c) 金銭の貸借

ア) 貸借の経験

表4-3に示したように、学校段階による有意な差が認められ(P<.01)、貸借を「よくする」と答えた者は、小・中学生で3~4%だが、高校生では14%であった。「時々する」者は小学生で20%台であるが、中・高校生では60%台に達している。性差も認められ(P<.05)、「よくする」と答えた者は男子に多く女子に少なかった。交互作用は認められなかったが、残差分析の結果、「よくある」は高校生男子に多く、「時々ある」は高校生女子に多かった。

イ) 貸す金額

表4-4に示したように、友人に貸してもよいと思う金額で最も多かったのは、小学生で「100円以下」、中学生が「101円~500円」、高校生が「501円~1,000円」であり、学校段階の進行とともに高額となり有意差が認められた(P<.01)。性差も認められ、女子に高額の者が多くなっていた(P<.01)。交互作用も認められた。(P<.05)

ウ) 借りる金額

表4-4 貸してもいいと思う金額

| | 0円 | 100円以下 | 101~500円 | 501~1000円 | 1000円以上 | その他 | 無答 | 計 |
|-----|-----------|-------------|-------------|-------------|------------|---------|---------|-----|
| 小学生 | 16(7.0) | 109(48.0)** | 77(33.9) | 12(5.3)-- | 8(3.5)-- | 0(0.0) | 5(2.2) | 227 |
| 中学生 | 7(1.9) | 46(12.6)-- | 195(53.4)** | 92(25.2) | 19(5.2)-- | 3(0.8) | 3(0.8) | 365 |
| 高校生 | 1(0.3) | 25(6.5)-- | 100(26.2)-- | 132(34.6)** | 87(22.8)** | 14(3.7) | 23(6.0) | 382 |
| 男子 | 14(2.9) | 108(22.5)** | 162(33.8)- | 107(22.3) | 62(12.9) | 7(1.5) | 20(4.2) | 480 |
| 女子 | 10(2.0) | 72(14.6)-- | 210(42.5)+ | 129(26.1) | 52(10.5) | 10(2.0) | 11(2.2) | 494 |
| 小学生 | 男子 8(7.0) | 55(48.2)** | 34(29.8) | 6(5.3)-- | 7(6.1) | 0(0.0) | 1(0.9) | 113 |
| | 女子 8(7.1) | 54(47.8)** | 43(38.1) | 6(5.3)-- | 1(0.1)-- | 0(0.0) | 4(3.5) | 114 |
| 中学生 | 男子 5(2.7) | 34(18.5) | 87(47.3)+ | 46(25.0) | 10(5.4)-- | 0(0.0) | 2(1.1) | 184 |
| | 女子 2(1.1) | 12(6.6)-- | 108(59.7)** | 46(25.4) | 9(5.0)-- | 3(1.7) | 1(0.6) | 181 |
| 高校生 | 男子 1(0.5) | 19(10.4)-- | 41(22.5)-- | 55(30.2)** | 45(24.7)** | 7(3.8) | 14(7.7) | 182 |
| | 女子 0(0.0) | 6(3.0)-- | 59(29.5)-- | 77(38.5)** | 42(21.0)** | 7(3.5) | 9(4.5) | 200 |
| 計 | 24(2.5) | 180(18.5) | 372(38.2) | 236(24.2) | 114(11.7) | 17(1.7) | 31(3.2) | 974 |

残差分析による有意水準*又は $p < .05$, **又は $p < .01$

三要因の尤度比検定

| 変 動 源 | 自由度 (df) | 尤度比 (G^2) | P |
|-----------------|----------|---------------|-----|
| 学校段階(A)×貸す金額(C) | 6 | 287.455 | .01 |
| 性別(B)×(C) | 3 | 15.753 | .01 |
| (A)×(B)×(C) | 6 | 16.098 | .05 |
| 計 | 15 | 319.306 | .01 |

表4-5 貸借のトラブルの経験

| | よくある | 時々ある | ない | 無答 | 計 |
|-----|------------|-------------|-------------|---------|-----|
| 小学生 | 11(4.8) | 48(21.1)- | 163(71.8) | 5(2.2) | 227 |
| 中学生 | 10(2.7) | 87(23.8) | 259(71.0) | 9(2.5) | 365 |
| 高校生 | 10(2.6) | 124(32.5)** | 242(63.4)-- | 6(1.6) | 382 |
| 男子 | 21(4.4) | 126(26.3) | 320(66.7) | 13(2.7) | 480 |
| 女子 | 10(2.0) | 133(26.9) | 344(69.6) | 7(1.4) | 494 |
| 小学生 | 男子 6(5.3) | 23(20.2) | 81(71.1) | 4(3.5) | 114 |
| | 女子 5(4.4) | 25(22.1) | 82(72.6) | 1(0.9) | 113 |
| 中学生 | 男子 6(3.3) | 40(21.7) | 132(71.7) | 6(3.3) | 184 |
| | 女子 4(2.2) | 47(26.0) | 127(70.2) | 3(1.7) | 181 |
| 高校生 | 男子 9(4.9) | 63(34.6)** | 107(58.8)-- | 3(1.6) | 182 |
| | 女子 1(0.5)- | 61(30.5) | 135(67.5) | 3(1.5) | 200 |
| 計 | 31(3.2) | 259(26.6) | 664(68.2) | 20(2.1) | 974 |

残差分析による有意水準*又は $p < .05$, **又は $p < .01$

三要因の尤度比検定

| 変 動 源 | 自由度 (df) | 尤度比 (G^2) | P |
|---------------|----------|---------------|-----|
| 学校段階(A)×貸借(C) | 4 | 12.929 | .05 |
| 性別(B)×(C) | 2 | 4.627 | ns |
| (A)×(B)×(C) | 4 | 6.377 | ns |
| 計 | 10 | 23.933 | .01 |

最も多かったのは、小学生が「100円以下」(56%)、中・高校生が「101円~500円」(54, 40%)であった。高校生では「1,000円以上」も14%みられ、学校段階の進行とともに高額となっていた($P < .01$)。性差も認められ($P < .01$)、男子は金額が分散しているが、女子は「101円~500円」が約半数を占めていた。交互作用も認められた($P < .01$)。割合を比較すると、貸してもよい金額より借りてもよい金額の方が安価である傾向がみられた。このことは、借金に対する消極的な意識の現れではないだろうか。

エ) 貸借のトラブル

表4-5のように、全体で約3割程が金銭の貸借でいやな思いをしたことがあり、「よくある」、「時々ある」を合わせると、高校生でやや多く、学校段階による有意差が認められた($P < .05$)。性差及び交互作用は認められなかったが、残差分析の結果、「時々ある」は高校男子に多く、全体的に男子の方が女子より「よくある」傾向が認められた。

以上の結果より、友人間での金銭の貸借は比較的頻繁に行われており、それに関わるトラブルの経験を持つ者も多く存在していることがわかった。これは、借金に対するルーズな感覚のあらわれとも考え

表4-6 性格特性と消費行動との関係

| | df | おごったり 品物をあげたりする | | おそろいをもつ | | 友人に 誘われて買う | |
|-----------------|----|--------------------|------|----------------|------|----------------|------|
| | | G ² | P | G ² | P | G ² | P |
| 性格特性(A)×従属変数(C) | 2 | 8.315 | <.01 | 29.414 | <.01 | 6.065 | <.05 |
| 学校段階(B)×(C) | 4 | 14.951 | <.01 | 126.817 | <.01 | 4.831 | n s |
| (A)×(B)×(C) | 4 | 4.715 | n s | -9.934 | n s | 1.456 | n s |
| 計 | 10 | 27.981 | <.01 | 146.297 | <.01 | 12.351 | n s |

表5-1 カードマネーに関する理解の程度 (%)

| | | 名称を 知っている | 性格を 知っている |
|----------|--------|--------------|--------------|
| 小学生 | 男子 | 99.1 | — |
| | 女子 | 100.0 | — |
| テレホンカード | 中学生 男子 | 98.9 | — |
| | 女子 | 100.0 | — |
| 高校生 | 男子 | 100.0 | — |
| | 女子 | 100.0 | — |
| 小学生 | 男子 | 83.3 | 71.9 |
| | 女子 | 81.4 | 72.6 |
| キャッシュカード | 中学生 男子 | 96.7 | 90.8 |
| | 女子 | 97.8 | 91.2 |
| 高校生 | 男子 | 96.2 | 88.5 |
| | 女子 | 99.5 | 95.5 |
| 小学生 | 男子 | 71.9 | 66.7 |
| | 女子 | 77.0 | 67.3 |
| クレジットカード | 中学生 男子 | 91.8 | 85.9 |
| | 女子 | 96.7 | 91.2 |
| 高校生 | 男子 | 91.8 | 85.7 |
| | 女子 | 98.5 | 95.0 |

注1) 知っている者の%のみ記した

られ、今日のように信用経済が発達した社会に生きる一員としての資質に欠けると思われる。

d) 性格特性との関連

友達つき合いの中での金銭使用が頻繁に行われていることから、友人関係における立場の違いによっても消費行動が異なるのではないかと考え、クロス分析を行った(表4-6)。その結果、友人関係の中で自分は中心的存在であると思う者ほど「友人におごったり品物をあげたりする」、「おそろいを持つ」、「誘われて買う」などの行動をとる者が多い傾向であった。

a)～d)の結果より、友人関係からみた金銭使用は目的的使用に次いで偶然的な飲み食いでの使用も多く、その際におごったりおごられたりなどの行

為を通してコミュニケーションを深めようとしていることが推察される。「おごり」は大人社会の模倣とも考えられ、場所や金額、内容とも学生らしからぬ場合が見られるという現場からの声も聞かれる。他にも、本調査のなかで、「友人とおそろいの品物を持つ」や「友人に誘われて買う」などの友人間のコミュニケーションと強く結びついた消費行動をとる者が7割前後存在していた。これらは仲間意識のあらわれとも考えられるが、反面、「仲間はずれにされたくない」という思いもあると思われる。この様に、金銭使用に関わる同調行為でコミュニケーションを図るという風潮は健全とはいえず、問題である。

以上のように児童・生徒の金銭に関する消費行動と家庭や友人の関連を考えると、それを望ましいものに導くためには、帰属集団単位での指導や、友人関係における性格特性を考慮した教育も必要ではなかろうか。金銭は生活を営む手段であり、人間関係を円滑にするための手段ではないことを明確にする必要がある。

2. カードマネーに関する理解の程度及び意識

表5-1に、カードマネーの名称及び性格に関する認識の状況を示した。

(1) 名称の認識

カードの名称については、全体的によく知っているが、小学生ではキャッシュカードが80%台、クレジットカードが70%台と認識の程度がやや低く学校段階による有意差が認められた($P<.01$)。テレホンカードとクレジットカードにおいて性差が認められ($P<.05$, $P<.01$)、男子の認識が低かった。

(2) 性格の認識

「銀行に預けてあるお金を出し入れできる」というキャッシュカードの性格を認識している者は、小学生では70%台であるが、中・高校生では90%前後を占めており、学校段階による差が認められた($P<.01$)。「お金の代わりにカードで買物ができる」というクレジットカードの性格については、キャッシュカードのそれより認識が低く、小学生では60%

表5-2 割高の認識

| | 知っている | 知らない | 無答 | 計 |
|--------|------------------------|-------------------------|----------|-----|
| 小学生 | 36(15.9) ⁻⁻ | 171(75.3) ⁺⁺ | 20(8.8) | 227 |
| 中学生 | 109(29.9) | 247(67.7) | 9(2.5) | 365 |
| 高校生 | 111(29.1) | 241(63.1) | 30(7.9) | 382 |
| 男子 | 126(26.3) | 322(67.1) | 32(6.7) | 480 |
| 女子 | 130(26.3) | 337(68.2) | 27(5.5) | 494 |
| 小学生 男子 | 17(14.9) ⁻⁻ | 83(72.8) ⁺⁺ | 14(12.3) | 114 |
| 小学生 女子 | 19(16.8) ⁻ | 88(77.9) ⁺ | 6(5.3) | 113 |
| 中学生 男子 | 59(32.1) | 121(65.8) | 4(2.2) | 184 |
| 中学生 女子 | 50(27.6) | 126(69.6) | 5(2.8) | 181 |
| 高校生 男子 | 50(27.5) | 118(64.8) | 14(7.7) | 182 |
| 高校生 女子 | 61(30.5) | 123(61.5) | 16(8.0) | 200 |
| 計 | 256(26.3) | 659(67.7) | 59(6.1) | 974 |

残差分析による有意水準⁺又は⁻⁻ $p < .05$, ⁺⁺又は⁻⁻ $p < .01$

三要因の尤度比検定

| 変 動 源 | 自由度 (df) | 尤度比 (G ²) | P |
|---------------|----------|-----------------------|-----|
| 学校段階(A)×割高(C) | 2 | 16.036 | .01 |
| 性別(B)×(C) | 1 | 0.009 | ns |
| (A)×(B)×(C) | 2 | 1.280 | ns |
| 計 | 5 | 17.325 | .01 |

台、中・高校生男子で80%台、同女子で90%台となっており、学校段階及び性差が認められた ($P < .01$)

(3) クレジットカードの運用に関する認識

表5-2に示したように、手数料等の付加による割高の認識(「品物の値段より高くなる」)を持つ者は全体的に低く、小学生で約15%、中・高校生でも約30%であった。学校段階による有意差が認められた ($P < .01$) が、性差及び交互作用は認められなかった。

表5-3、5-4に示したように、借金の認識(「お金を借りることと同じである」)や多額債務者についての認識(「使い過ぎてお金を返せなくなり困っている人がある」)を持つ者は、高校生でも50%前後で、学校段階による有意差は認められるものの、全体的に認識の程度が低かった。性差及び交互作用は認められなかったが、残差分析の結果、借金の認識を持つ者は高校生女子に多かった。

表5-5のように後払いの認識(「品物を先に使いながら後でお金を返していけばよい」)を持つ者は、小学生では約40%であるが、高校生では約80%に増加しており、学校段階による有意差が認められた ($P < .01$)。性差も認められ ($P < .05$)、女子の認識が高かった。交互作用は認められなかった。

表5-3 借金の認識

| | 知っている | 知らない | 無答 | 計 |
|--------|-------------------------|-------------------------|---------|-----|
| 小学生 | 83(36.6) ⁻⁻ | 128(56.4) ⁺⁺ | 16(7.1) | 227 |
| 中学生 | 172(47.1) | 181(49.6) | 12(3.3) | 365 |
| 高校生 | 181(47.4) | 171(44.8) | 30(7.9) | 382 |
| 男子 | 199(41.5) | 249(51.9) | 32(6.7) | 480 |
| 女子 | 237(48.0) | 231(46.8) | 26(5.3) | 494 |
| 小学生 男子 | 38(33.3) ⁻ | 65(57.0) ⁺ | 11(9.6) | 114 |
| 小学生 女子 | 45(39.8) | 63(55.8) | 5(4.4) | 113 |
| 中学生 男子 | 84(45.7) | 93(50.5) | 7(3.8) | 184 |
| 中学生 女子 | 88(48.6) | 88(48.6) | 5(2.8) | 181 |
| 高校生 男子 | 77(42.3) | 91(50.0) | 14(7.7) | 182 |
| 高校生 女子 | 104(52.0) ⁺⁺ | 80(40.0) ⁻⁻ | 16(8.0) | 200 |
| 計 | 436(44.8) | 480(49.3) | 58(6.0) | 974 |

残差分析による有意水準⁺又は⁻⁻ $p < .05$, ⁺⁺又は⁻⁻ $p < .01$

三要因の尤度比検定

| 変 動 源 | 自由度 (df) | 尤度比 (G ²) | P |
|---------------|----------|-----------------------|-----|
| 学校段階(A)×借金(C) | 2 | 8.071 | .05 |
| 性別(B)×(C) | 1 | 3.555 | ns |
| (A)×(B)×(C) | 2 | 1.201 | ns |
| 計 | 5 | 12.826 | .05 |

消費者信用白書のクレジットカード利用動向によると、18~29歳の若い年代の利用経験が高い⁴⁾ことが明らかになっており、利用者予備軍ともいえる高校生においても、このように運用の仕組みの認識が低いのは問題である。特に、男子に対して認識の向上が望まれる。

(4) クレジットカード使用に対する意識

表5-6に示すように、全体的に「無関心」の者が多く、次いで「使いたくない」という者が多かった。「便利である」という者は10%台であるが、中・高校生ではやや増加し、「かっこいい」という意識の者はわずかであった。学校段階による有意差が認められ ($P < .01$)、性別でも男子に「知らない」、「無関心」が、女子に「使いたくない」が多く有意差が認められた ($P < .01$)。交互作用は認められなかったが、残差分析の結果より、中学生男子に「無関心」が、高校生女子に「使いたくない」が多かった。

このようにクレジットカードの使用に対する意識は、消極的あるいは否定的な傾向が強いと言える。

今後もキャッシュレス化はますます進行すると言われており、児童・生徒が経済社会の変化に対応できるように、知識だけでなく主体的にカードを取り入れることのできる価値観や態度を形成することが

表5-4 多額債務者の存在の認識

| | 知っている | 知らない | 無答 | 計 |
|--------|------------------------|-------------------------|---------|-----|
| 小学生 | 95(41.9) ⁻⁻ | 116(51.1) ⁺⁺ | 16(7.0) | 227 |
| 中学生 | 208(57.0) ⁺ | 145(39.7) ⁻ | 12(3.3) | 365 |
| 高校生 | 204(53.4) | 157(41.1) | 21(5.5) | 382 |
| 男子 | 250(52.1) | 203(42.3) | 27(5.6) | 480 |
| 女子 | 257(52.0) | 215(43.5) | 22(4.5) | 494 |
| 小学生 男子 | 48(42.1) | 55(48.2) | 11(9.6) | 114 |
| 小学生 女子 | 47(41.6) ⁻ | 61(54.0) ⁺ | 5(4.4) | 113 |
| 中学生 男子 | 107(58.2) | 70(38.0) | 7(3.8) | 184 |
| 中学生 女子 | 101(55.8) | 75(41.4) | 5(2.8) | 181 |
| 高校生 男子 | 95(52.2) | 78(42.9) | 9(4.9) | 182 |
| 高校生 女子 | 109(54.5) | 79(39.5) | 12(6.0) | 200 |
| 計 | 507(52.1) | 418(42.9) | 49(5.0) | 974 |

残差分析による有意水準*又は $-p < .05$, **又は $--p < .01$

三要因の尤度比検定

| 変 動 源 | 自由度 (df) | 尤度比 (G^2) | P |
|------------------|----------|---------------|-----|
| 学校段階(A)×多額債務者(C) | 2 | 10.958 | .01 |
| 性別(B)×(C) | 1 | 0.051 | ns |
| (A)×(B)×(C) | 2 | 0.839 | ns |
| 計 | 5 | 11.847 | .05 |

表5-5 後払いについての認識

| | 知っている | 知らない | 無答 | 計 |
|--------|-------------------------|-------------------------|---------|-----|
| 小学生 | 90(39.6) ⁻⁻ | 121(53.3) ⁺⁺ | 16(7.0) | 227 |
| 中学生 | 249(68.2) | 106(29.0) | 10(2.7) | 365 |
| 高校生 | 297(77.7) ⁺⁺ | 63(16.5) ⁻⁻ | 22(5.8) | 382 |
| 男子 | 294(61.3) ⁻ | 159(33.1) ⁺ | 27(5.6) | 480 |
| 女子 | 342(69.2) ⁺ | 131(26.5) ⁻ | 21(4.3) | 494 |
| 小学生 男子 | 45(39.5) ⁻⁻ | 58(50.7) ⁺⁺ | 11(9.6) | 114 |
| 小学生 女子 | 45(39.8) ⁻⁻ | 63(55.8) ⁺⁺ | 5(4.4) | 113 |
| 中学生 男子 | 125(67.9) | 54(29.3) | 5(2.7) | 184 |
| 中学生 女子 | 124(68.5) | 52(28.7) | 5(2.8) | 181 |
| 高校生 男子 | 124(68.1) | 47(25.8) | 11(6.0) | 182 |
| 高校生 女子 | 173(86.5) ⁺⁺ | 16(8.0) ⁻⁻ | 11(5.5) | 200 |
| 計 | 636(65.3) | 290(29.8) | 48(4.9) | 974 |

残差分析による有意水準*又は $-p < .05$, **又は $--p < .01$

三要因の尤度比検定

| 変 動 源 | 自由度 (df) | 尤度比 (G^2) | P |
|----------------|----------|---------------|-----|
| 学校段階(A)×後払い(C) | 2 | 96.552 | .01 |
| 性別(B)×(C) | 1 | 5.902 | .05 |
| (A)×(B)×(C) | 2 | 17.362 | .01 |
| 計 | 5 | 119.816 | .01 |

表5-6 クレジットカード使用に対する意識

| | 知らない | 無関心 | かっこいい | 便利 | 使いたくない | 無答 | 計 |
|--------|------------------------|-------------------------|---------|-----------------------|-------------------------|---------|------|
| 小学生 | 76(20.3) ⁺⁺ | 146(38.9) ⁺ | 3(0.8) | 43(11.5) ⁻ | 97(25.9) | 10(2.7) | 375 |
| 中学生 | 28(4.7) ⁻⁻ | 286(48.1) ⁺⁺ | 11(1.8) | 104(17.5) | 155(26.1) ⁻ | 11(1.8) | 595 |
| 高校生 | 15(3.6) ⁻⁻ | 211(42.0) | 7(1.4) | 80(16.0) | 187(37.3) | 2(0.4) | 502 |
| 男子 | 80(10.8) ⁺⁺ | 346(46.9) ⁺ | 14(1.9) | 113(15.3) | 172(23.3) ⁻⁻ | 13(1.8) | 738 |
| 女子 | 39(5.3) ⁻⁻ | 297(40.5) ⁻ | 7(1.0) | 114(15.5) | 267(36.4) ⁺⁺ | 10(1.4) | 734 |
| 小学生 男子 | 53(27.0) ⁺⁺ | 77(38.4) | 2(1.1) | 27(13.4) | 36(18.3) ⁻⁻ | 4(2.0) | 199 |
| 小学生 女子 | 23(13.6) ⁺⁺ | 69(39.2) | 1(0.6) | 16(9.1) ⁻ | 61(34.3) | 6(3.4) | 176 |
| 中学生 男子 | 18(5.8) | 163(52.1) ⁺⁺ | 8(2.4) | 51(16.5) | 65(21.0) ⁻⁻ | 7(2.1) | 312 |
| 中学生 女子 | 10(3.5) ⁻⁻ | 123(43.4) | 3(1.1) | 53(18.6) | 90(31.8) | 4(1.4) | 283 |
| 高校生 男子 | 9(4.0) ⁻ | 106(46.5) | 4(1.8) | 35(16.2) | 71(30.8) | 2(0.9) | 227 |
| 高校生 女子 | 6(2.4) ⁻⁻ | 105(38.8) ⁻ | 3(1.5) | 45(16.2) | 116(41.6) ⁺⁺ | 0(0.0) | 275 |
| 計 | 119(8.1) | 643(43.7) | 21(1.4) | 227(15.4) | 439(29.8) | 23(1.6) | 1472 |

残差分析による有意水準*又は $-p < .05$, **又は $--p < .01$

三要因の尤度比検定

| 変 動 源 | 自由度 (df) | 尤度比 (G^2) | P |
|---------------|----------|---------------|-----|
| 学校段階(A)×意識(C) | 8 | 105.468 | .01 |
| 性別(B)×(C) | 4 | 41.261 | .01 |
| (A)×(B)×(C) | 8 | 0.488 | ns |
| 計 | 20 | 147.398 | .01 |

必要であろう。特にクレジットカードに関しては、それが借金であることの認識を持ちながら、個人の生活能力にあわせて使用する態度を育成することが望まれる。

要 約

小学5年生から高校3年生までの各学年の児童・生徒を対象に、学校教育における金銭面での消費者教育の教材化の基礎資料を得るために、児童・生徒の金銭消費の実態及びカードマネーに対する理解の程度を調査し、以下の点が明らかになった。

1. 学校段階の進行とともに、浪費的で無計画、また依存的になる傾向がみられた。
2. こづかいの金額が増えるに従い、用途も広がるが、管理能力が十分でないため1と同じ傾向が強くあらわれた。
3. 家庭における金銭教育は実際的な消費行動を望ましいものに向くほどの効果はなく、また放任的な

様子も推察された。

4. 友人との交際における金銭の消費活動にはコミュニケーションを重視した同調的傾向がみられた。
5. カードマネーの名称や性格は高校生になるとほぼ了解してくるが、クレジットカードの運用に関する認識はまだ低かった。またクレジットカードに対してはほとんどが無関心又は否定的な意識をもっていることがわかった。

参 考 文 献

- 1) 小木紀之：「消費者問題の今日的特質と課題」・『家庭科教育』、家政教育社、61巻9号、8、1987
- 2) 小谷正守：「現代日本の消費経済」、ミネルヴァ書房、193、1985
- 3) 朝日新聞、朝日新聞社、昭和63年8月24日
- 4) 「昭和61、62年版消費者信用白書」、日本クレジット産業協会、118、1988